



オーガスト
オフィシャルハンドブック
2014年新春号

大図書館の羊飼

Dreaming Sheep

a good librarian like a good shepherd after and another stories

 AUGUST

P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

既に公式サイトなどの告知でご存知の方もいらっしゃると思いますが、2014年1月31日に、『大図書館の羊飼』通常版を発売することとなりました。

また同時に、在庫が無くなっていた『大図書館の羊飼い〜放課後しっぽデイズ〜』も増産致します。

どちらも、よろしくお願い致します。

また、今回のコミックマーケット85（2013年冬コミ）では、オーガスト初のコンサートイベント『トラベリング・オーガスト』を映像化したDVDを発売致します。

コンサートにお運び頂いた皆様にはその思い出保存になると思いますし、残念ながらチケットの抽選に外れてしまった皆様には会場の雰囲気を感じて頂けることでしょう。

よろしければ、是非お手にとって頂ければと思います。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2013年末 オーガスト /ARIA 拜

CONTENTS

- 3 …… 『大図書館の羊飼』Short Story
三億年の戦い
- 7 …… 『大図書館の羊飼い -Dreaming Sheep-』
新作情報
- 10 …… スタッフ対談
- 11 …… あとがき



三億年の戦い

大図書館の羊飼 ショートストーリー

榊原 拓

今日も一日、図書部に寄せられた多種多様の依頼をこなしているうちに日が暮れ、夜も深まった。
部屋に帰ってシャワーを浴び、髪が乾く間も惜しんで本をめくり始める。

この時間が、今の俺に唯一残された至福の時間だ。

「おお……」
もちろん、図書部の活動が楽しくないわけではないし、仲間との信頼関係は想像以上に俺を満たしてくれた。

しかし……この綴じられた紙の束の小口を指の腹で撫で、ページを繰り、活字の海にダイブする悦びには何ものも敵わ——

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン！

異様な速度で連射されたインターホンが狂ったような音を立てた。
ゆらりと立ち上がる。

今の俺は宗教の勧誘だろうが新聞の拡張員だろうがブリタニカで張っ倒す。

その覚悟で扉を開けた。
「入るわよー」

立っていたのは小太刀。
俺の殺気などまるで気にせず、押しつけて部

屋に入ってこようとする。

「あのなーお前、何だよこんな時間に」

「いいから入れてよ」

「いいから、ってことはないだろ。理由を言え理由を」

「入れてくれたら話す」

「そういう取り引きはしない」

「入れろー！ 入れろー！」

騒ぎ始めやがった。

やむなく口を押さえて部屋に引き込む。

他の住人が廊下に出て来る前で良かった。

「ありがと」

「で？ 入れてやったんだから理由を教えろ」

「出たの」

「幽霊？」

「そんなもんいないから。出たのはゴキブリ」
くだらん理由で読書を邪魔されたものだ。

「何とかしてよ」

「そんなつまらない理由で、夜中に男の部屋に転がり込むな」

「つまらないでしょー」

「つまらん。スリッパでも丸めた新聞紙でも何でもいいから、さっさと叩いてケリつけろ」

「ムリ。絶対ムリ。死んでもムリ」

「ゴキブリごときで死なないから。死ぬ気で頑張れ」

冷たく突き放す。

一人暮らしをするのであれば、ヤツとの格闘くらいこなせねばなるまい。

……すると、小太刀はぎょっとするほど瞳に涙を溜め、俺を見つめてきた。

「なら寛の部屋に住む」

「ムチャ言うなよ」



「駄目。あの部屋には二度と戻れない。世界が滅びるまで」

これは……
面倒だとか俺をからかっているとかなさそうだ。

そういうえばギザも苦手だったし、もしかして人間以外の生き物は全て苦手なのか。

だとしたら、確かにゴキブリは最高ランクの無理度だろう。

よく見ると脚も生まれたての子鹿のようにぶるぶる震えている。

「ねえ、お願い。頼れるの、寛しかないんだから……」

涙目ですががりついてくる小太刀。どうやら本気で恐がっているようだ。

「はああ……」

ここまで弱つてると、さすがに追い返すわけにもいかない。

「しゃーない。ゴキブリ退治手伝ってやるよ」

「ほんと？ 寛やっさしー」

口調はアレだが、心底ホッとした顔で言われる。ま、さっさと片付けて読書に戻るとしよう。

俺は丸めた雑誌を武器にする。
一つしかなかった殺虫剤のスプレー缶は小太刀に持たせ、部屋に向かった。

「ほら、扉を開けてくれ」

「鍵はかけてないから、寛が先に入ってよ」

「自分の部屋だろ」

「寛の後ろに隠れてついてくから」

完全にビビってる小太刀は、俺の背中にぴたっつくつきた。
「くっつきすぎだ」

「いいから」

「その胸はわざと当ててんのか」

「んなわけないでしょ！」

なんて言いつつも、離れようとしていない小太刀。そのままかばう形でドアノブをひねり、部屋に入る。

「……」

部屋を見回す。
相変わらず、物が極端に少ない部屋だ。

本棚の後ろとか、ベッドの下とか、隠れられそうな場所すら無い。

物音を立てないようにして、気配に耳を澄ます……が、とりあえずそれらしき足音などは感じられなかった。

「で、どこに出たんだ？」

「キッチンと居間の間あたり」

指差された場所を見ても、当然ヤツの姿はない。キッチンにも物はほとんどなく、生ゴミや買い置き食材などは見当たらなかった。

身を隠せそうな場所は……流しの下とかか。

「開けるぞ？」

「どーぞ」

観音開きの扉を開けてみたりしたが、それらしき姿は見つけられない。

いつでも丸めた雑誌を振り下ろせるように緊張していた肩の力を抜く。

溜息を一つ。
「……いないじゃないか」

「いたの！」

「何か別のもの見間違いとかな」

「んなわけないでしょ！！」

「這ってても黒豆」ってことわざ、知ってるか？」

「這ってたんだから黒豆のほすくないでしょ」

「……」

「じゃあ、待つてみるか」

「どこで？」

「この部屋で」

「嫌」

「んなこと言ってもな。ここで殺っておかないと、解決しないだろ」

「でもー」

「でもじゃない。俺を信じて背中を預ける」

「……うー、わかった。信じてるからね」

互いの死角を無くすため、背中合わせで部屋の中央に立つ。

「……うー、わかった。信じてるからね」

「……うー、わかった。信じてるからね」

「……うー、わかった。信じてるからね」

「……うー、わかった。信じてるからね」

「……うー、わかった。信じてるからね」

「……うー、わかった。信じてるからね」

「……うー、わかった。信じてるからね」

「……うー、わかった。信じてるからね」

みるか」

「エサって何よ」

「えーと」

携帯で検索すると、ヒトの食物は何でも食うものの、特にパンやタマネギや油が好きらしい。

「俺の部屋にあるのは油くらいか。取ってくるからちょっと待ってろ」

「えっ」

玄関に向かおうとした俺のシャツの裾を握る小太刀。

「やだ」

「やだって」

「一人で待つなんて怖くて無理に決まってるでしょ。私も行く」

「好きにしてくれ」

小太刀の部屋を出て廊下を歩き俺の部屋へ。

その間も小太刀はずっと俺のシャツの裾を握っている。

「まだ掴んでんのか」

「いいじゃない」

「俺だけ逃げたりとかしないから」

「持つてると安心するだけ」

「……まあいいけどさ」

小皿に油を垂らし、それを持って再び部屋に戻るまで、大人しくしたまま小太刀はずっと裾を握り続けていた。

「さて」

部屋の隅に油を垂らした小皿を置き、再び俺達はさっきと同じフォーメーションを取る。

丸めた雑誌を握りしめる。

背中合わせの小太刀も、殺虫剤のスプレー缶

を構えた。

どこから出てきてもすぐに対応できるように、視線を部屋の隅から隅へと走らせる。

息を詰める。

……しかし、人間の緊張感が持続する時間には限界というものがある。

「せめて座ろうぜ」

「んだね」

背中合わせに座る。

互いに少しずつ体重を相手に預け、服の布地越しに相手の体温を感じた。

これはこれで……確かに安心するかも知れない。

「でもさ、こんだけ明るい部屋で、しかも殺気立って待つてる人間が二人もいたら出て来ないかもな」

「どーすんのよ」

「電気を消してみるとか」

「やめて。暗闇でアイツと戦える気がしない」

「それもそうか」

しかしこのままでは長期戦は必至だ。

「じゃあさ、こういうのはどうだろう」

「あによ」

「俺は本を読みたい。小太刀は怖い」

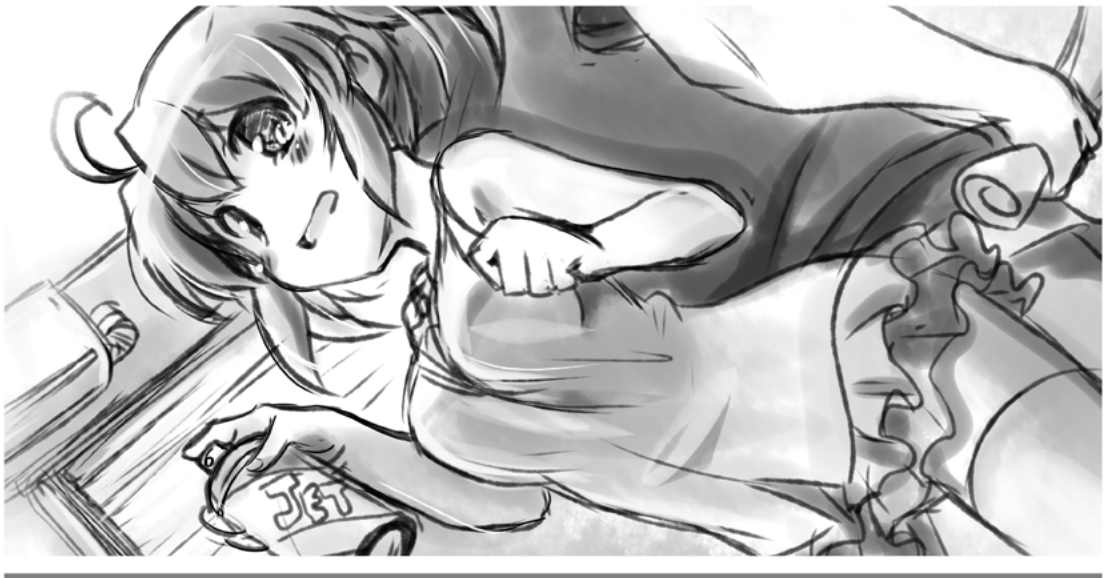
「そーね」

「なら、俺はここで本を読みながらヤツの出現を待つ。小太刀は俺の部屋に避難する。これで完璧だろ」

「却下」

「なんでだよ」

「あんた本を読み始めたら、ゴキブリどころか熊が出て来ないでしょ。それじゃいつまで待っても無駄じゃん」



「……それもそうか」
なかなかいい解決策は見つからない。
ネットをしてみる。

「あー、アシダカグモっていうデカイ蜘蛛が、
ゴキブリを捕食してくれるらしいけど」

「デカイ蜘蛛と暮らすって発想がまず却下」
「ですよー」

「あと、そんな蜘蛛がすぐ手に入るわけない
でしょ」

「どーだろ。節足動物愛好会とかに行けば飼
つてるかも」

「その愛好会の人たちとは、私、友達になれ
ないわ」

「差別はどうかな」
「差別なんかじゃないし、どうしても差別だ
つていうなら差別主義者で結構」

行き詰まった。

仕方ない。俺が小太刀が眠気に負けるまで、
もうしばらく付き合うか。

「ふわ」
思わずアクビがでる。

「ふわわー」

……小太刀にもアクビが伝染ったようだ。
「ねーアクビなんかして大丈夫？」

「小太刀もしてたら」
「私のは寛から伝染っただけ」

「……ふわー」
「ふわわ……ほらまたー」

「アクビが伝染るのは、注意力が下がってる
時に『今この群れが敵に襲われたら危ない』
と知らせる本能だつて説がある」

「私と寛が群れてること？」
「そんなもんだろ。ゴキブリという外敵と戦

闘中だ」

「まあね」

「あと、アクビは親しいほど伝染りやすい。
知り合いよりも友達、友達よりも家族や恋人」

「寛のアクビ、かなり伝染ったけど……」
「恋人並みだな」

「な、なーに言ってるんだか」
「恋人ってよりは……世話の焼ける妹つてと
ころだけだな」

「はっかじゃないの」
小太刀の顔は見えない。

でも、俺が言ったことに偽りは無かった。
こんな夜中に、背中合わせで下らない話をし
たりするなんて、不思議な関係だ。

「……なんか、付き合わせてごめんね」
「どうした急に」

「なんとなく」

「隣に住んでる仲だし、ちよくちよく呼び出
されるならともかく、非常時くらいは仕方な
いさ」

「そう？ やさしーね」

「その分、俺がピンチに陥ったら助けてくれ」
「地震で倒れてきた本棚に埋まったりと
か？」

「ああ、ありそうだ」
「わかった」

背中を感じる小太刀の体重が、ほんの少しだ
け重くなる。

続けて、頭ももたれてきた。
こちらに身を預けているのだ。

これは……頼りにしてくれている、というこ
とだろうか。

それとも。

「……すー……すー……」
寝ていた。

じびつてたんじゃないのかわ。
小さい声で呼びかけてみる。

「おーい、小太刀さーん」
「……すー」

うとうとしたとかじゃなく、このままだと本
格的に寝入ってしまった。

振り返ると、小太刀の身体が倒れそうになる。
慌てて支えた。

——ぼよん

俺の二の腕を感じる弾力。
胸の膨らみを横から押す形で、小太刀の身体
を支えることになってしまった。

……こりゃ本気で起こした方がいいな。
あれだけ恐慌状態に陥ってた割に、安心して
つたようなその横顔が小憎らしい。

「小太刀、おい、小太刀つてば」
「……ふわ？」

「寝落ちしてたぞ、お前」
「あれ？ 私……寝ちゃっきゃああああ！！」

「ん？」

まん丸に見開かれた小太刀が見つめる先へ、
視線を走らせる。

カーテンの裏から、すすすつと壁を伝う黒い
楕円。

部屋の照明をてらてらと反射し、長い触覚を
揺らしている。

「くっ」

反射的に立ち上がろうとするが、小太刀が後
ろから抱きついていてため立てやしない。

「離せっ」
「やだやだやだやだっつー！！」

むぎゅむぎゅと押し付けられる胸。
その感触を味わう余裕も無いほど締められる
俺の首。

「苦しいっ、苦しいって!」

「あっ、ごめ」

小太刀を振り切り、壁に向けて雑誌を振り下
ろす。

パコッ

ヤツは音もなくすすすつと壁を這い、身を
かわす。

どこかの隙間に隠れる前、今やるしかない。
二度、三度と丸めた雑誌を振り下ろす。

パコッパコッ

動きのパターンが読めたっ

次はここだ! と先読みを入れた場所に振り
下ろす。必勝の構え。

ひらり

ふうふうううん!

飛んだ!?

そして、その先には小太刀が――

「ぎゃあああああああああああ!」
スプレー缶を壊れんばかりに握りしめ、ノズ
ルからは殺虫剤の霧が噴出される。

「くるなああああああ!」
ゴキブリは天井にぶつかったりしながら飛翔
を続ける。

小太刀は狂ったようにスプレーを部屋に撒く。
この部屋にいる生き物全てが死にそうな濃度
になりつつあった。

「落ちて小太刀っ」

ぽと

殺虫剤を浴びたゴキブリが小太刀の頭に着地。
「いーーーーー」

ぽと

「いーーーーー」

「いーーーーー」

夜空を切り裂く金切り声。

直後、スプレー缶で自らの頭を強打。

「きゅう」

ぱたりこ、と小太刀は床に倒れた。

俺は素早く三重にしたティッシュで黒い悪魔
を包み込み、握りつぶす。

そして、大急ぎで窓を開ける。

「死ぬかと思った……」

新鮮な空気の有り難みを心から味わった。

「はあ、やっとこれで安心して眠れるわ」

「まだしばらくは窓開けとけよ」

「そうする。ありがと覚、そんじゃねー」

ぱいっと廊下に追い出され、扉がぱたんと閉
まる。

相変わらず素っ気ない。

でもまあ小太刀だしな……なんて思って部屋
に戻ろうとしたところで、後ろで扉が開いた
気配。

「今日は助かったわ。今度何か御礼するから」

「おう」

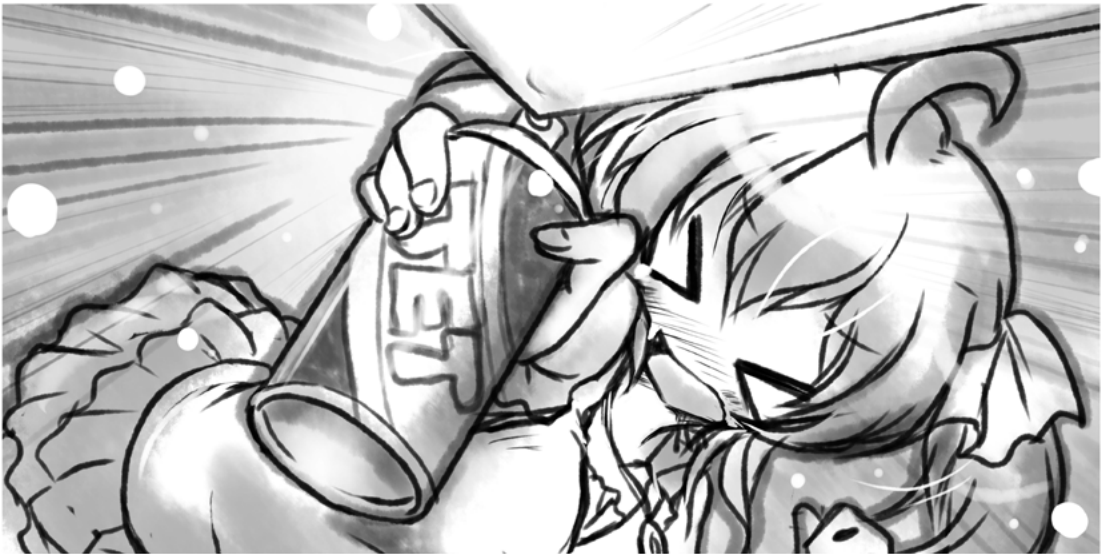
微妙に視線を泳がせながら、少し裏返った声
でそれだけ言うと、小太刀は部屋に引っ込ん
だ。

見間違いないかなければ、その頬は少し赤ら
んでいたように思う。

……今日は、最後に珍しい表情の小太刀を見
れたからそれで良しとするか

読書を邪魔された割には寛大な気分で、俺は
部屋に戻った。

END



大図書館の羊飼!

Dreaming Sheep

a good librarian like a good shepherd after and another stories

もうすぐ
また会えるね!

いかり
ちやかり
宣伝☆

大図書館の羊飼
Dreaming Sheep

2014年3月28日発売予定!
私達も登場するので皆さん
是非予約して下さいね!

早直撮れよ...

ニマー
ダレーン
(B) (B)

さういえば大図書館DSの
ホームページにのぞみ達
居たけど...

PC

は

!?

マンガ：夏野イオ



from STAFF

2013年1月に発売された「大図書館の羊飼い」。そのファンディスクである今作「大図書館の羊飼い -Dreaming Sheep-」は、本編の後日談を中心に、ヒロインと結ばれたあとのラブラブなお話がたくさん収録されています。人目もはばからずイチャつく二人にその他の図書部員たちは当てられっぱなしの毎日。そんな平和な日常の中にも、本編を経て確かに成長したキャラクター達の活躍を、お楽しみ頂ければ幸いです。

当作品では、メインヒロインはもちろん、本編非攻略キャラであった多岐川葵、それにご要望の多かったスピンアウト作品「大図書館の羊飼い -放課後しっぽデイズ-」のヒロイン二人にも、Hシーンを含む後日談をご用意しました。その総シナリオ本数はのべ20本以上。本編をお楽しみ頂いた方はもちろん、本編未プレイの方にも、ぜひ今のうちに本編をプレイして頂きつつ、当作品もお手に取って頂ければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

大図書館の羊飼い Dreaming Sheep

対応機種：WindowsXP/Vista/7(32/64bit)

シナリオ：神原拓・内田ヒロユキ・安西秀明 ほか

原画：べっかんこう 原画補助：夏野イオ

購入制限：18歳未満の方はご購入できません

2014年3月28日発売予定 好評予約受付中!

榊原拓(榊):さて対談の時間がやって参りました!
べっかんこう(べ):さあ今回は何の話をしましょうか。
榊:実は今回あまりネタがありません。
べ:ほぼずっと新作の『大図書館の羊飼い-Dreaming Sheep-』の開発に取り組んでますからね。
榊:ちなみに社内での略称はDSです。
べ:ですね。さてDSの進捗はどんなものなのでしょう。
榊:シナリオは9割方完成してて、スクリプトや演出が始まってます。
べ:原画も冬コミの頃には終わってるかなー。
榊:こっちも、冬コミ時点だともう少し進んでるかも。
べ:今回は対談が小冊子発行よりかなり早いので、こういう話題はズレが出そうですね。
榊:11月末には予約も開始される予定です。
べ:まあ開発の方は順調ということで。予約して下さいね!
榊:よろしくお願ひします!
べ:さてさて、たまにはソフトのアンケート結果を詳しく見てみましょうか。
榊:しっぽデイズで、前回触れなかったこととか。値段はもっと高くてもいいから18禁にしてほしかった、というご意見については?
べ:企画の段階からコミケでの販売をメインに考えてたこともあって、18禁にはしづらかったんです。
榊:コミケの会場で、あの速度でお客様に販売する中で、年齢確認はちょっと難しいですもんね。
べ:雑誌などでも既にお知らせしていますが、DSにはのぞみと朔夜のHシーンもありますので、ぜひそちらもよろしくです。
榊:キャラ人気はどうですか。
べ:僅差でのぞみが朔夜を上回ってますが、コメントなどを見ると朔夜ファンは熱狂的な印象ですね。
榊:何となくわかるような気も。
べ:あと、ギザ様にもかなりの票が入ってました。投票理由、けっこう「ギザ様だから」ってのが多くて面白いです。
榊:重要キャラですからね!
べ:あと、今回Webアンケートにしたからか、結構外国の方のアンケートもありますよ。
榊:通販は国外発送してませんし、タイミングを見てもコミケですね。
べ:コミケは結構外国人のお客さんもいらっしゃいます。お買い上げありがとうございました。
榊:夏は暑かったですねー。
べ:そして最近では寒いです。
榊:冬コミでは風邪などひかめようお気をつけ下さい。
べ:僕らもな!

ソフト対談 第37回 べっかんこう & 榊原拓



POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

現在、開発室では『大図書館の羊飼』のファンディスク、『大図書館の羊飼い-Dreaming Sheep-』の制作が山場を迎えています。
各パートともクオリティを上げられるよう鋭意努力して参りました。これからも、マスターアップ直前の最後の一瞬までその作業は
続いていくでしょう。

発売日は2014年3月28日です。
私達の励みにもなりますので、よろしければ、是非ご予約をお願い申し上げます。

それでは、今回はこの辺で。
今後ともオーガスト/ARIAをよろしく願い致します。

2013年末 オーガスト/ARIAスタッフ一同



オーガストオフィシャルハンドブック
2014年新春号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>
<http://aria-soft.com/>

Senri
Misono

大図書館の羊飼!
Dreaming Sheep
a good librarian like a good shepherd of her and another stories



大図書館の羊飼!

Dreaming Sheep
a good shepherd like a good shepherd after and another starts

オーガストオフィシャルハンドブック
2014年新春号

